

「に」と共起する数量詞表現について

林佩芬

国際言語文化研究科研究生

peifen100@hotmail.com

1. はじめに

(1) a 10 人の子供に中国語を教えている。

b 子供 10 人に中国語を教えている。

c*子供に 10 人中国語を教えている。 --- (数量詞遊離)

(1)a と(1)b は、いずれも成立するが、(1)c は非文であると判断される。(1)c のように、数量詞「10 人」は名詞句「10 人の子供 / 子供 10 人」から格助詞「に」を飛び越えて遊離することは、一般に数量詞遊離現象と呼ばれている。そして、数量詞遊離現象(1)c の不適格性について、奥津(1969)等は、統語範疇の観点から、間接目的語からの数量詞移動はできないと指摘し、柴谷(1978)は、統合範疇によらず格範疇の観点から、与格名詞節からの数量詞遊離はできないとしている。また、八木(1994)は、数量詞が遊離することによって、直接目的語「中国語」と間接目的語「子供」のいずれを修飾するかが定かではないため(1)c は非文としている。しかし、(1)c と同じ語順構造で、(2)のような表現があり、また(3)の数量詞表現も自然であると判断される。

(2) 主人はテーブルの前に坐り、巻煙草に 1 本火をつける。『青空』

(3) 死んでしまった友達のお墓にいき、煙草に 2 本火をつけ、一本は墓前に供えた。(作例)

八木によると、(2)(3)の数量詞「1 本」は、直接目的語「火」と間接目的語「巻煙草」のいずれを修飾するかが定かではないが、(2)(3)の場合には、数量詞「1 本」はいずれも専ら間接目的語「巻煙草」「煙草」のみを修飾している。従って、八木(1994)の解釈は妥当性を欠いている。本稿は、基本的に柴谷(1978)の遊離数量詞の適格性は格範疇にあるとする知見による。ただし、本稿は、柴谷(1978)では詳しく論じられていなかった「に」の各用法における 3 つの型の数量詞表現を考察し、また、そのなかで遊離可能と判断される文に対して、その遊離現象を考察する。

2. 「に」の用法と数量詞の位置

助詞「に」は、()格助詞の ~ の用法と、()並立助詞の の用法に分類されている(注1)。

()格助詞「に」の用法

事物の(ある状態で)存在する場所を表す。

- (4) 3本の穂先に (穂先3本に、*穂先に3本) (は)、しっかり実が入っていた。(作例)

動作・作用の帰着点を表す。

- (5) 今更ここで詮議をしていることもできないので、異人たちを 3匹の馬に (馬3匹に、*馬に3匹) 乗せて、ひと足先に帰すことにして、別手組の2人はあとから徒歩で帰りました。『青空』
- (6) 友人は、私の庭の 8本の薔薇に (薔薇8本に、*薔薇に8本) 目をつけ、意外な事実を知らせてくれた。『青空』
- (7) 10人の子供に (子供10人に、*子供に10人) 中国語を教えている。((1)を再掲)
- (8) 主人はテーブルの前に坐り、巻煙草に1本 (一本の巻煙草に、巻煙草1本に) 火をつける。(2)を再掲)
- (9) カラオケの後、2軒の居酒屋に (居酒屋2軒に、居酒屋に2軒) 行った。(作例)

変化の結果を表す。

- (10) ある場合には、3枚の素材を 7枚の作品に (作品7枚に、*作品に7枚) 仕上げ、ある場合には5枚の素材を21枚にひきのばす。『青空』

動作・作用の行われる時・場所に表す。

- (11) 18歳の誕生日に (*誕生日18歳に、*誕生日に18歳) 免許を取った。(作例)
- (12) 東海岸沿いの約九万平方メートルの土地に (土地約九万平方メートルに、*土地に約九万平方メートル) 採石場をつくり、軟砂岩を採取する。(作例)

動作・作用の向けられる対象を表す。

- (13) 時雨もようの夕に春日に森で若い 2人の巫女に (巫女2人に、*巫女に2人) 会ったことがある。『青空』
- (14) 治修はある時 2人の鷹匠に (鷹匠2人に、*鷹匠に2人) それぞれみずか

ら賞罰を与えた。『青空』

動作・作用の目的を表す。

- (15) 吉良上野介の息子が、47 土の討入りに(*討入り 47 土に、*討入りに 47 土)参加するなんてことが、許されるかね。『貴族の階段』 p.58

動作・作用をうける場合の動作の主や、作用の出所を表す。

- (16) もはや思い残すことのない父親は、やがて、エンゼルの姿をした 2 人の息子に(息子 2 人に、*息子に 2 人)手をとられて色とりどりの麗わしい花園を歩いている夢を見ながら、天国へ去りました。『青空』

原因・理由・動機・由来など、動作・作用・状態の依拠する点を表す。

- (17) 八月の中ごろ、私はお隣の庭の、3 本の夾竹桃に(夾竹桃 3 本に、*夾竹桃に 3 本)ふらふら心をひかれた。『青空』
- (18) そしてたちまち 1 本の灌木に(灌木 1 本に、*灌木に 1 本)足をつかまれて投げ出すように倒れました。『青空』

比較・評価・割合などの基準を表す。

- (19) この数学の問題は、3 歳の子供に(*子供 3 歳に、*子供に 3 歳)難しすぎる。(作例)
- (20) 水道も共同のものが二十八本あるだけだ。1 本の水道に(水道 1 本に、*水道に 1 本)約七百人が依存している。『朝日』 2001.02.15

その状態を成立させている内容を表す。

- (21) 彼女は 1 つの才能に(才能 1 つに、*才能に 1 つ)たよりすぎているため、何の努力もしない。(作例)

動作・作用の行われ方・状態を表す。

- (22) 桜にまつわる思い出をつづった手紙を 3 枚の原稿用紙に(原稿用紙 3 枚に、*原稿用紙に 3 枚)して恋人に送った。(作例)

()並立助詞「に」の用法

事物を累加的に列挙する。

- (23) 1 本の大根に 2 本のにんじんに(大根 1 本ににんじん 2 本に、*大根に 1 本ににんじんに 2 本)、えーと、それからトマトも少しもうおうかしら。(作例)

対比的・対照的な二つのものを取り合わせ、全体として何らかの意味で統一されるそれぞれを結びつける。

- (24) 雲ひとつない一面の夜空に (夜空一面に、*夜空に一面)星ひとつ。(作

例)

3.まとめ

以上の考察により、助詞「に」と共起する 3 つの型の数量詞表現について以下のようにまとめる。

「Q の N に型」: ~ におけるこの型の数量詞表現は自然であり、適格と判断される。ただし、(11)動作・作用の行われる時、(15)動作・作用の目的、(19)比較・評価などの基準のように、修飾する数量詞で被修飾語の名詞を数えることが不可能である場合、数量詞はその名詞の数量ではなく、その名詞の性質、状態、特徴表わしている。

「NQ に型」の数量詞は(11)(15)(19)では非文である。従って、修飾する数量詞で被修飾語の名詞の数量表わすことが不可能である場合は、この型は用いられない。この型の数量詞表現はやや書面語に近い感じがする場合があるが、(11)(15)(19)を除いては、自然であり、適格である。

「N に Q 型」の数量詞表現は(2)(3)(8)(9)以外は非文と判断される。一方、遊離可能と判断されるのは、(2)(3)(8)(9)のような着点を含意する場合である。なお、(2)(3)(8)(9)の数量詞が数量の取り立てや対比など強調やレトリックの描写を含意する文脈に使われる場合、文としての自然さが高くなると考えられる。

(注 1) ~ の分類は、『日本文法大辞典』明治書店(1971)や、先行研究の知見をもとに整理したものである。なお、『日本文法大辞典』の記述に見られる「動作・作用の行われる時・場合」の「場合」は「場所」に変えた。

引用文献

- 奥津敬一郎(1969)「数量的表現の文法」『日本語教育』14号 10月 日本語教育学会 pp.42-60
柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店 pp.242-247
八木恵子(1994)「数量詞の位置 『二』格で転位を起こすのは」『埼玉大学紀要 総合篇』第13巻 埼玉大学教養部 pp.135-144

例文出典

- 『青空』:『茶漉』日本語用例・コロケーション抽出システム(一般公開版)。
『朝日』:朝日新聞 CD-ROM における 2001 年の記事。
『貴族の段階』:武田泰淳(1963) 新潮文庫 1968 年刊。